



品質は語る……

白松がモナカ本舗

漱石羊羹



数量
限定

漱石の好んだ
ピーナッツと紅茶。
二つの味を漱石の
好物だった羊羹に。

販売価格
1,450円

紅茶

ピーナッツ 落花生

販売場所：三越、藤崎、エスパル、仙台駅おみやげ処1号2号店、
一部直営店（駅前店・一番町店・中央店・晩翠通店・大学病院前店）

※表示価格は消費税込みです。直営店にてご用命をお待ち申し上げます。

漱石生誕150年 仙台と夏目漱石

漱石の蔵書のほとんどは
東北大学図書館にある

戦火が激しくなった昭和19年、明治の文豪夏目漱石（1867～1916）の貴重な蔵書や日記、手帳など約3,000点が、東京の「漱石山房」から仙台の東北大学に移されました。これらの資料は「漱石文庫」と名付けられ、漱石研究に役立てられています。生誕150年の今年、東北大学附属図書館と白松がモナカ本舗ではこれを記念し漱石に関わるコラムを連載します。

ロンドンで中古自転車に乗るの巻

漱石センセイを巡る物語 —その⑦—



※イメージ

風を切って自転車で走りたくなる季節です。115年前の秋、漱石も滞在中のロンドンで自転車にトライ。帰国後に、自虐的なユーモア漂う追想記「自転車日記」（明治36年6月「ホトギス」に掲載）を残しています。33歳の漱石が、英語教育研究のために、文部省派遣の国費留学生として2年間のイギリス留学に出發したのは明治33年（1900）秋でした。9月8日に横浜港を出航し、10月8日にアラビア半島イエメンのアデン港に寄港。イタリアのジェノバに上陸後は、ヨーロッパを見物しながら、10月28日にロンドンに到着します。

しかし、留学生活は順調なものではなかったようです。極東からやって来た「黄色人種」への偏見もあった時代。気候もなじまず、給費は乏しく研究も進まず、次第に神経衰弱に陥り、下宿に引きこもるように。のちに漱石自身、

「倫敦（ロンドン）に住み暮らした二年はもっとも不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあって狼群に伍（ご）する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり」（『文学論』）と、回想しています。

そんな漱石を見かねて、「自転車に御乗んなさい」と勧めたのが、下宿の女主人リール姉妹でした。留学2年目の秋のことです。当時、イギリスでは自転車が大ブーム。サイクリングが新たな娯楽となり、サイクリスト向け雑誌が発行され、中古自転車も出回るなど、庶民にも広まっていました。

「ああ悲いかな、この自転車事件たるや、余はついに婆さんの命に従って自転車に乗るべく否自転車より落るべく「ラヴェンダー・ヒル」へと参らざるべからざる不運に際会せり」（自転車日記）

とまあ、リール姉妹を婆さん呼ばわりして悲劇の主人公のような書きぶりですが、これは照れ隠し。自転車ブームを目の当たりにして興味はあったのでしょう。「思えらく能者筆を振ばず」と、中古自転車を手し、友人を監督兼教師にして、練習を始めます。ところが、

「ハンドルなるもの神経過敏にて、こちらへ引けば股にぶつかり、向へ押しやると往來の真中へ馳け出そうとする、乗らぬ内からかくのごとく処置に窮するところをもって見れば乗った後の事は思いやるだに涙の種と知られける」と、乗る前から悪戦苦闘。「落ちてても人の笑わなような所」で練習したり、坂を転げ落ちるように下って板塀にぶつかって止まり、巡査から「だいぶお骨が折れましよう」と笑われたり。

散々な目にあいながらも、やがて、自転車で1時間以上かかる友人の下宿まで、遠出できるほど上達します。自転車の爽快感は、漱石の精神にも良い影響を与えたのでしょう。その年の暮れ、無事に帰国の途に着きました。

夏目漱石
【慶応3年(1867)
～大正5年(1916)】

季節の上生菓子

粒よりの栗が奏でる
秋の味わい。



数量
限定

栗おぐら銀寄

大納言あずきと大粒の銀寄栗を使い、ひとつづつ茶巾しぼりに仕上げました。

栗かのこ

やわらかな求肥を白餡で包み、蜜漬けた大粒の栗を飾り載せました。

「栗おぐら銀寄」
1個・200円

「栗かのこ」
1個・220円

※表示価格は消費税込みです。
直営店にてご用命をお待ち申し上げます。



白松がモナカ
白松がヨーカン